

## 徳川全史、権力承継の要探る

ありそうでなかった徳川通史である。江戸時代は専門の細分化が著しく、通史は不可能かと思われたが、中東史の専門家であり中国史やヨーロッパ史にも詳しい著者はパクス・トクカワナの生みの親・徳川家康に強くひかれるがゆえに敢えてこの難業に挑戦した。

では、通史でなければならなかった理由とはなんだろうか？ それ

は、フランスのサリカ法のような厳密な相続規則をもたず、緩い直系規則だけで將軍を決めていた徳川体制がなぜかくも長く続いたのかその理由を知りたかったからだと思う。この問題へのアクセスの道はいくつかのカテゴリーに分けられる。

①家康―秀忠、秀忠―家光の時代のように、大御所が新將軍を指

導する二元的君主制は二重権力による対立・分裂の危機も孕むが、一方では安定的な世襲王朝を可能にする。家康と秀忠はこの共同王体制の成功例であり、秀吉と秀頼は失敗例であった。

②新將軍は、秀忠の土井利勝、家光の稲葉正勝、綱吉の柳沢吉保、のように側用人政治を行いがちだが、こうした側用人政治の本質はなんだったのか？ 「無制約の権

③直系相続は御三家を創設した家康の慧眼があっても断絶の危機は避けられない。傍系から新將軍を選ぶ継承問題が必ず党派的对立と連動して分裂の危機をもたらすからだ。八代吉宗、十四代家茂の継承決定がその例である。

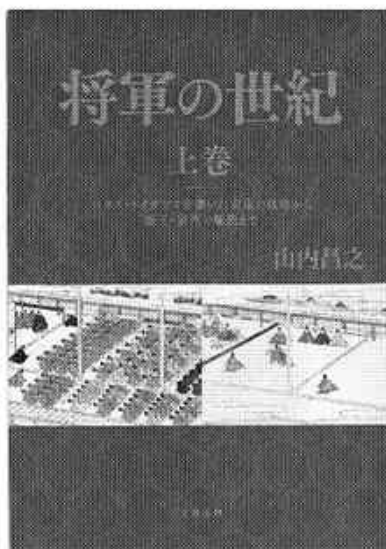
④外国船の来航で鎖国体制が揺らぎ、身分制度の固定で人材が払底した幕末には、もう一つ、秀忠時代以来抑圧されていた天皇権力が水戸藩の尊王攘夷でにわか復活するという大きな問題が現れる。

力を動かす支配者は、政治の手足になる者に絶対的服従を要求する。ここに支配者の抜擢と登用により側近集団が生まれる根拠がある。(中略)政務は老中や若年寄の仕事である。彼ら「側用人たち」は支配者たる綱吉の意志や願望を実現するために奉仕する「官吏」にほかならない」

本書は下巻すべてを③と④の問題に費やして詳しく論じているが、それは著者が「終わりの始まり」という点で現代と似たものを感じているからなのかもしれない。専門書なみの学識を詰め込みながらきわめて読みやすい決定版徳川通史、いや全史となっている。

《評》 仏文学者

鹿島 茂



(文芸春秋・上下各3740円)  
やまうち・まさゆき  
47年生まれ。歴史学者。東京大学名誉教授。著書に『オスマン帝国とエジプト』『スルタンガリエフの夢』など。